



ぼくの隣でおばあさんが目玉焼きハンバーグを食べていた。

ぼくも美味しそうだったので、同じものを頼もうと思った。が、高齢者と同じ食べ物を食べるのは何となく癪だと思い、オススメメニューのパウンダーステーキを頼んだ。目玉焼きハンバーグよりも四百四十円高かった。注文を取りに来た店員は、かしこまりましたと言うと、無駄な動きを一つとせずに厨房へと向かっていった。一連の動作は、まるで次世代型ロボットのように美しく出来上がったものだった。

注文してしばらく、ステーキが届いた。と同時に、隣のおばあさんが、何やら店員に文句を言っていることに気付いた。わたしが注文していたのは実はチーズハンバーグだったと店員に不平をこぼしていた。

店員はぼくの注文をとった人で、年齢はぼくより一個か二個上のように見えた。

「申し訳ございません。」

へこへこと二回、腰から上をおばあさんに向かって下げた。

「これがチーズじゃなかったら食べなかったわよ。もう。」

老眼鏡をクイと上げながら、おばあさんは言った。

それを真横に、ぼくは目の前の肉に容赦なく齧り付いた。

食事を終えると、先ほどのおばあさんのいたところに、大人の女子と子供の男性が対面して座っていた。

早速、食後の水を飲み、席を立とうとした。が、その女性と男性が何を注文するかということに不思議と興味がわいた。

おかわりの水をコップに注ぐ。水がこぷこぷと溜り、水面張力になる前には止めた。こぼれないよう気を付けて口元へコップを運ぶ。ごくりと喉を唸らすと、ちょうどあの店員が二人の注文を取りに来た。

聞き耳を立てながら、だが自然を装い、それとなく二人の注文を聞いた。

「チーズハンバーガー一つとパウンダーステーキ一つ。」

男性がそう言うと、店員は再び規則正しく速やかに厨房へと姿を消した。

ぼくは、ハンバーグを食べるのが女子で、ステーキを食べるのが男性なのか、それとも逆のことなのか一層気になってしまっていた。

右手を梃子に、テーブルと口をコップが往復していた。

水を殆ど飲み干してしまったころには、右手が冷たくなってしまっていた。しょうがないので、冷たくなった右手にハアと暖かい息を吹きかけた。途端、右手が唇に触れた。ステーキを食べる前の冷たいナイフがそこに触れたような感触だった。

横を見ると、大人の女子が、ハンバーグとステーキを食べていた。

ぼくはすかさず店員を呼びつけ、水が凄く美味しくなかったと不平を言った。